

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：33104

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24510387

研究課題名(和文) 大衆メディアに見る第二次世界大戦期と戦後秩序の中のジェンダー・エスニシティ

研究課題名(英文) Comparative Analysis of the Representation of Gender Ethnicity during World War II and the Post War World Order

研究代表者

杉村 使乃 (SUGIMURA, Shino)

敬和学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：20329337

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究グループは第二次世界大戦下のイギリス、アメリカ、中国、ドイツ、日本における大衆メディア(一般大衆紙、女性誌、映画など)を用い、ジェンダー・エスニシティ表象分析に取り組んできた。戦時下では総力戦にふさわしい「国民」の再生産のために言説と画像が意識的に操作され、戦況によって女性やエスニックグループを国家に都合良く包摂・排除するため、表象には揺らぎが見られる。戦時下に見られた揺らぎは戦後においてどのような影響を与えたのか、あるいは変化したのか、時系列を戦後に伸ばし、表象分析を行った。また、戦時中のメディア表象が戦後のジェンダー秩序や「国民」形成にどのような影響を及ぼしたのか国際比較を行った。

研究成果の概要(英文)：This research has been focusing on the analysis of the representations of gender and ethnicity through popular media such as magazines and films created and published in Britain, US, China, Germany, and Japan during the World War II. Our research has shown that these media greatly contributed to nationalizing women and minor ethnic groups at the war. We have seen the borders of gender roles often blurred because the war often widens the spheres for women and minorities as they are expected to fill in the positions after men are driven away to the front. However, in the most of the countries above, there was a strong back-rush for women in the post-war time, and they were encouraged to return to the rather conservative roles at home. In this research, the post-war representations of gender and ethnicity are compared with those of the war-time, and how they are influenced to each other and adapted to the post-war order of gender and ethnicity in each country.

研究分野：イギリス文化・文学

キーワード：ジェンダー 戦争 メディア 表象 エスニシティ 戦後秩序 西洋史 東洋史

1. 研究開始当初の背景

本研究グループは平成 16 年より、主に第二次世界大戦下、イギリス・アメリカ・中国・ドイツ・日本において刊行された女性雑誌・一般大衆誌のジェンダー・エスニシティ表象を分析し、国際比較を行ってきた。またメディア表象分析に先立ち、第二次世界大戦時における女性の戦争協力について調査を行ってきた。これまで「表象に見る第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」(H17~19 基盤研究(B) 課題番号 17310154)、「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・エスニシティ表象の国際比較」(H21~22 挑戦的萌芽研究 課題番号 21652019) この二つの課題に取り組み、成果を関連する学会やシンポジウムで発表してきた。

これまでの研究から、特に女性の戦時活動については既存のジェンダー秩序を揺るがすものであったことが明らかになった。大衆メディアはジャーナリスティックな記録であるだけでなく、国家や「国民」、またジェンダー秩序を再構築していく手段である。そして戦時下では総力戦にふさわしい「国民」の再生産のために言説と画像が意識的に操作され、戦況によって女性やエスニックグループを国家にとって都合良く包摂・排除するため、表象には揺らぎが見られる。戦時下に見られたジェンダー・エスニシティ表象は戦後においてどのような影響を与えたのか、第二次世界大戦時という共時的な比較検討を継続するとともに、時系列を戦後に伸ばし、戦後秩序におけるジェンダー・エスニシティ表象を検討する必要があることに考えが至った。

2. 研究の目的

上記を踏まえ、第二次世界大戦下の欧米の参戦国(イギリス・アメリカ・ドイツ)と日本、中国の大衆メディアを取り上げ、各国のジェンダー・エスニシティ表象について階層性に留意しつつ、更に調査・分析・成果発表を進める。また戦時下と戦後のジェンダー・エスニシティ表象の異同を浮かびあがらせる。各国の戦時下の「国民」動員に関する方針・戦略、そして戦後秩序における各国のジェンダー・エスニシティに関する政策を分析し、国家によるジェンダー・エスニシティの包摂と排除のプロセスに、いかにメディア表象が関わったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

第二次世界大戦下、および戦後の欧米の参戦国(イギリス・アメリカ・ドイツ)と日本、中国の主に雑誌などの大衆メディア表象の調査・分析を進める。また戦時下と戦後のジェンダー・エスニシティ表象の異同を浮かびあがらせる。その際、各メディアの特徴や、各国の戦時下での「国民」動員に関する方針・戦略、そして戦後秩序における各国のジェンダー・エスニシティに関する政策に留意し、国家によるジェンダー・エスニシティの

包摂と排除のプロセスに、いかにメディアが関わったのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) イギリスについて(担当 杉村)

読者層の異なる雑誌 3 誌、写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』(一般大衆)、女性月刊誌『ガールズ・OWN・ペーパー』(10 代、女子学生が主)、女性週刊誌『ウーマン』(10 代後半~20 代前半)を取り上げ、表紙写真、グラビア記事における女性表象について比較検討した。

写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』は、アメリカの『ライフ』、日本の『写真週報』、『アサヒグラフ』に相当する存在で、女性誌二誌については、読者層が異なり、戦時活動に対する態度にも違いがある。『ガールズ・OWN・ペーパー』(*Girl's Own Paper* 1880-1956 以下 GOP) は女性のリクルートに積極的に関わった。『ウーマン』は、比較的早い段階で教育を終え、働き始める 10 代後半のワーキング・ガールから、結婚を控えた若い女性たち、また一部の既婚女性や若い母親たちを対象としている。ヒロインの恋愛を主題とした 4 小説が主なコンテンツで、戦間期に与えられた新しい機会を謳歌しつつも、「女らしさ」や結婚、そして家庭での役割を重視する。

厳しい戦況の中では、三誌とも女性たちの戦時活動が国家にとって有用なものとして表象する。『ピクチャー・ポスト』では、女性の戦時活動が補助的で一時的なものであることが強調される。一方、女性誌では、戦時活動の女性たちが憧れの存在としても扱われ、戦時活動は、国家への奉仕という意味合いを超えて、自己実現の機会を与える場として表象された。しかし、男性に代わる労働力として幅広い年齢層と階層の女性を「国民」へと包摂することに一役買ったこれらの雑誌は、戦後、瞬間に女性たちを家庭へと誘導するようになった。

(2) ドイツについて(担当 桑原)

ナチ政権期に発行部数第一位を誇った官製女性雑誌『ナチ女性展望』を分析対象とし、『ナチ女性展望』が伝えるヒトラー像、連載小説における女性主人公の表象、そして戦後への考察のため、期間を敗戦から初代連邦首相コンラート・アデナウアー時代(1949 年 9 月~1963 年 10 月)の 50 年代まで伸ばし、西側占領地区、そしてその後の西ドイツにおけるドイツ人女性の就労、家族、そして家族法の調査、を分析のテーマとして据えた。

ヒトラー像に関しては、掲載された写真、ヒトラー自身の言葉、ヒトラーについての記事の統計を取り、分析を行った。そこから浮かび上がるのは「解放者・救世主としての総統」、「傑出した指導者」、「国民から愛され慕われる総統」、「芸術・文化の擁護者」、そして開戦後は「最高司令官としての総統」としてのヒトラー像である。開戦後、ヒトラー熱は急激に冷めるが銃後が崩れなかったのは、

戦前に出来上がったヒトラー像に負う所が多い。プロパガンダによって作り出されたヒトラーのイメージこそが、期待と信頼を持って受け入れた当時のドイツ国民にとっての現実の総統だったことは、歴史的事実として認識されるべきである。

連載小説については、掲載された15編すべてを分析した。時代背景に第一次世界大戦の直前・戦中・直後を設定している作品が半数以上に上る。ほとんどすべての主人公が女性であり、そのタイプは、国策としての工業と農業のイメージやジェンダー理解と結びつけられている。

ナチス政権期の作家は、国民啓蒙・宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッベルスの支配下にあった全国著述院に迎え入れられなければ執筆活動ができなかったため、イデオロギーへの配慮は必須だった。しかし、官製雑誌であったことを考えれば、プロパガンダ的作品は極めて少ないといえる。

戦後のドイツ人女性について、女性就労の変遷、日常生活と家族関係、戦後ドイツ社会の保守的イデオロギーと家族政策、基本法および家族法改正という視点から考察した。戦後の西ドイツでは、終戦の日を「零時」と呼び、戦後の再出発であると認識する傾向が強い。再建の最初の風景に現れたのは「瓦礫を片付ける女性たち」だった。彼女たちは、過酷な労働条件にもかかわらず、就労を余儀なくされた女性たちだった。しかし、捕虜から男性が帰還すると女性は不当に解雇され、「経済の奇跡」により労働力不足になると、今度は安価な労働予備軍として恣意的に企業から利用された。女性たちは、経済政策の犠牲者だったといえる。

(3) アメリカについて

『ライフ』の表象分析(担当 平塚)

第二次世界大戦下と冷戦初期の『ライフ』におけるジェンダー表象に着目し、戦時下及び60年代以降と比較しながら、時代との関連や影響関係を明らかにするべく研究を進めた。

ジェンダーに関しては、戦後、冷戦期、表向きは伝統的な規範に回帰し、『ライフ』のジェンダー表象もそうした社会の流れに沿っていた。一方、戦後さらに加速する産業化や消費社会の到来によって、女性の労働意欲は強まり、男女間の労働条件には大きな開きがあるものの、既婚女性の就労者数は戦前より増加している。この時期の『ライフ』は、戦時に起こったジェンダーの揺らぎの戦後への影響の痕跡を確実に捉えており、この時代が戦時中とフェミニズム運動が盛んになる60年との連続性の中で捉えられることを『ライフ』の女性表象は示唆している。

アメリカ女性誌『レイディース・ホーム・ジャーナル』(Ladies' Home Journal 1943-1945 以下、LHJ)の表象分析(担当 松崎)

戦前、戦中を通じ「専業主婦こそがアメリカ女性のあるべき姿」という基本理念で 300

万の読者を誇ってきた LHJ が、戦後 1950 年代の終わりに至るまで、同じコンセプトで更に読者数を増やしたと背景にはどのような社会現象があるのか検討した。戦後の LHJ では、戦時協力体制をとる必要がない分、「専業主婦」の肯定・賛美がより先鋭化し、戦時のメッセージ「主婦の仕事イコール戦争協力」から、専業主婦の仕事は高度な専門的要素をそなえた「キャリア」なのであるという主張が変わっていく。戦勝国アメリカの目覚ましい産業発展による物質的繁栄、ベビーブーム、冷戦にともなう政府の極端な反共政策による国民の内向き傾向、テレビの普及などから「快適な家族生活」に重きが置かれるようになったことがその背景にある。専業主婦は最新の電化製品を使いこなして、その結果生まれた余暇を自分磨きに利用する、時代の最先端に行く専門職であるというイメージの刷り込みに LHJ は成功した。こうしたイメージは、独身女性にも大きな影響を与え、大学進学率や若い女性の就労人口の減少すら招いた。

ハリウッド映画に見る戦時下の女性について(担当 松崎)

前線で厳しい日々を過ごす看護師を主人公にした作品 (*So Proudly We Hail*, 1943) と、夫の出征中、ホームフロントで日々の暮らしの中、戦争に向き合っていく既婚女性を主人公にした作品 (*Since You Went Away*, 1944) とを対比させ、総力戦の中、女性が果たすべき役割とともに、アメリカ社会が求める「女らしさ」の表象について考察した。また、背景にあった政府のプロパガンダ政策と担当部署 (the Bureau of Motion Pictures) が映画製作にどのように介入していったのか、それに対してハリウッドという一大勢力をバックに、製作者側がどう対応したのか調査した。

女性写真家による日系アメリカ人の収容所の記録と戦時下のエスニシティ、ジェンダー表象分析(担当 松崎)

著名な女性記録写真家ドロテア・ラング (Dorothea Lange 1895-1965) による第二次大戦下日系アメリカ人収容と被収容者の写真と、他の男性カメラマンたちの写真との比較検討を行った。弱者に寄り添うラングの眼差しは、政府のプロパガンダや、メディアにおける日系人やマイノリティに対する眼差しを考える上で示唆的である。

(4) 大陸の表象

満州移民映画について(担当 池川)

池川は、これまでも一貫して、プロパガンダ色の強い日本製映画を研究対象としてきた。同時代の国際情勢と深く関わり合いながら制作された、戦中の満州移民映画研究を深化させ、その成果を広く公開した。2011年に上梓した単著『「帝国」の映画監督 坂根田鶴子 『開拓の花嫁』・一九四三年・満映』を発展させた報告を国際シンポジウムで行った(「満州農業移民におけるジェンダー 政

策・実態・メディア」日中韓女性史国際シンポジウム「女性史・ジェンダー史からみる東アジアの歴史像」2013年11月16～17日於：青山学院大学）

華北交通写真とメディア表象（担当 松本）

京都大学人文科学研究所所蔵の36000点あまりの『華北交通写真』コレクションを精査し、その性格の概要を明らかにした。それらの写真と雑誌『北支画刊』（満鉄北支事務局編、東京平凡社刊）、『北支』（華北交通資業課編、東京第一書房刊）他華北交通刊行物、タイアップ刊行物、教科書、絵葉書、『写真週報』（内閣情報局刊）大東亜博覧会、朝日新聞等への掲載との関連性について取り組んだ。そして、この『華北交通写真』の性格、特に、ジェンダーとエスニシティ関連の事項について分析を行った。

華北交通写真の現地のイメージは、「明るい」、「発展した」、「快活な」、「伝統ある」、「珍しい」ものが多く、その他「資源」、「風俗」、「宗教」、「歴史文物」、「風俗・民俗」、「交通」、「学校」など、プラスのイメージを付与された被写体が多い。ジェンダー、エスニシティからみると、モンゴル人とムスリムの女性が大きく取り上げられている。これは植民地をジェンダー化するというオリエンタリズムの定石を踏襲するものである。また、読者に占領下の中国が安定しており、中国の人々も日本の占領を「喜んで」受け入れているというイメージを発信している。

(5)日本の表象

『アサヒグラフ』の表紙写真分析（担当 神田）

連携研究者の神田は、『青年（女子）』のジェンダー表象研究を継続するとともに、第二次世界大戦時、及び戦後における『アサヒグラフ』の表紙写真について分析、考察を開始した。この研究については、現在進行中で継続して行われている。

占領期に制作された民主主義啓蒙映画（担当 池川）

戦前・戦中映画との連続性・非連続性に着目しつつ「婦人解放」に重点の置かれた作品の分析を試みた。GHQ/SCAPの主導によって制作された『伸びゆく婦人』（1949年）に焦点をあて、映像表象分析に加え、現存する複数の台本や関連文書の検討、さらに制作の背景となった政治的・社会的状況、制作過程に関わった多くの人々の果たした役割等を、特に女性史的な視座から考察した。ジェンダー、エスニシティ、デモクラシーといった多様な要素が互に干渉し合いつつ、「戦後」の「望ましい」日本女性のイメージが形作られていった過程を明らかにした。

単行本『ヌードと愛国』の刊行にあたっては、財団法人女性学習財団機関誌『We Learn』連載のエッセイ『「はだか」のジェンダー史』（2013年4月～2014年3月）をベースにし

た。メディア横断的に多種多様な素材を扱いヌード表象を通じて、近代日本のナショナル・アイデンティティ、女性クリエイター問題、西洋諸国と日本、そして日本とアジア諸国の間で交わされた視線の権力問題、戦後の男性性の再構築の問題等を個別具体的にかつ時系列に記述することによって、視覚文化に立脚した日本女性史を記述する試みである。

玉砕神話、原爆・核表象とジェンダー（担当 加納）

第二次世界大戦末期の連合国軍によるサイパン攻略と日本の玉砕は、そして原爆投下とその後の『ライフ』、『ピクチャー・ポスト』においても大きく取り上げられた。加納は、雑誌や文学における玉砕に関する言説を精査し、ジェンダーとエスニシティが交錯する玉砕神話の構築性を明らかにした。

戦後へ目を向けるとき、原爆投下と核時代の到来は共通の大きなテーマとなった。加納は、女性が被害者性や平和のイメージを担われる一方、原爆が圧倒的なパワーを象徴するものとして、日本においても肯定的に、そして男性性を付与されて表象されてきたことを、雑誌、広告、映画、文学作品に見られる表象分析から明らかにした。また、そうした肯定的なイメージが戦後の積極的な「核の平和利用」に先鞭をつけたものとして、現在に至る問題提起を行った。このテーマに関しては、以下のシンポジウムを開催した。

シンポジウム「Remapping Hiroshima: 「ヒロシマ」を（再）マッピングする 核時代の到来・起点としての「ヒロシマ」」

2015年3月15日 於 広島市まちづくり市民交流プラザ

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/event/?p=366>

(6)他研究機関・プロジェクトの連携

H25年度より京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）の共同利用に参加させてもらったことにより、より幅広い研究成果報告と、異なる分野の研究者たちからの批判を受ける機会を得ることが可能になった。上記シンポジウムの他、以下がある。

公開シンポジウム「ビジュアル・メディアとジェンダー」、2013年12月15日、於：東洋文庫

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/event/?p=266>

神奈川大学非文字資料研究センター租界班 第46回研究会（拡大例会）「図像資料の研究を考える - 戦争と生活」2014年12月6日 於：神奈川大学横浜キャンパス
<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/news/>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計19件）

桑原ヒサ子、「ドイツ人女性の戦後 「零時」からの出発」、『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』13号、2015、1-20

平塚博子、「『リロイ・ジョーンズ/アミリ・バラカの自伝』におけるアミリ・バラカの新たなブラックネスの模索」、『黒人研究』、査読有、84号、2015、46-54

桑原ヒサ子、「女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載された連載小説とその作家たち」、『敬和学園大学研究紀要』24号、2015、39-60

松本ますみ、「モンゴル人と「回民」像を写真で記録するということ 「華北交通写真」からみる日本占領地の近代」、『交感するアジアと日本』(アジア研究 別冊3)、査読有、静岡大学人文社会科学部、2015、27-54

加納実紀代、「「輝く女性」今昔ものがたり岐路に立つ日本のフェミニズム」、『インパクション』、査読有、197号、2014、80-89

加納実紀代、「殉国と黒髪 「サイパン玉砕」神話の背景」、『インパクション』、査読有、196号、2014、36-49

加納実紀代、「女たちの解放への欲求をくみ上げた「国防婦人会」市井の女たちの戦争協力：特集 歴史に学ぶ 戦時体制はいかにつくられたか」、『女も男も：特集 歴史に学ぶ 戦争体制はいかにつくられたか』、査読有、123号、2014、4-16

杉村使乃、「「グラマー」たちの第二次世界大戦：イギリスの週刊女性誌『ウーマン』表紙に見る女性表象」、『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』12号、2014、27-40

<http://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2014/05/nenpo12-3.pdf>

平塚博子、「戦争・国家・人種：「新」南部物語としての『墓地への侵入者』」、『Soundings』、査読有、40号、2014、93-104

平塚博子、「第二次世界大戦下のアメリカのメディアがみた日本 『ライフ』が報じた日本像」、『国際文化表現学会『国際文化表現研究』Expressions、査読有、9号、2014、303-314

桑原ヒサ子、「女性雑誌『ナチ女性展望』が伝えるヒトラー像」、『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』11号、2013、93-120

<http://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2013/11/nenpo11-6.pdf>

神田より子、「『アサヒグラフ』の表紙に見るジェンダー表象(1)」、『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』11号、2013、61-92

<http://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2013/11/nenpo11-5.pdf>

加納実紀代、「原爆表象とジェンダー」、『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』11号、27-36

<http://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2013/11/nenpo11-3.pdf>

松崎洋子、「第二次世界大戦下ハリウッド女性映画に見る表象 前線・ホームフロント・ジェンダー・プロパガンダ」、『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』11号、37-60

<http://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2013/11/nenpo11-4.pdf>

松本ますみ、「1930年代の中国ムスリム向

け漢語雑誌にみる国際意識」、『SIAS Working Paper Series』、査読有、19号、2013、27-48

松本ますみ、「雲南におけるイスラーム帰郷現象と中阿学校：世俗化・漢化は克服できるか」、『中国の「国境文化」の人類学的研究 研究成果報告書』、2013、59-77

池川玲子、「占領軍が描いた日本女性史：CIE映画『伸びゆく婦人』の検討」、『歴史評論』、査読有、753号、2013、23-34

加納実紀代、「原爆・原発・天皇制」、『運動<経験>』、査読有、344号、2012、36-45.

加納実紀代、「「原子力の平和利用」と女性解放」、『季刊 ピープルズ・プラン』、査読有、58号、54-60

(学会発表)(計16件)

松本ますみ、「日本占領下中国ムスリムが伝えた中東情勢：1930年代末から1940年代初頭」、『アジアのムスリムと近代』研究班ワークショップ(招待講演)、2015年3月2日、上智大学イスラーム研究センター(東京都、千代田区)

MATSUMOTO, Masumi, "Islamic Education for Women in China: Vocational or Ethical Schooling?" The Third International Symposium of Inner-Asia Research Networks (招待講演)、2015年2月28日、東洋文庫(東京都、文京区)

松本ますみ、「モンゴル人と「回民」像を写真で記録するということ 「華北交通写真」からみる日本占領地の「近代」」、『国際シンポジウム「交感するアジアと日本」(招待講演)、2015年2月27日、静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター(静岡県、静岡市)

桑原ヒサ子、「女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載されたファッションと料理のページから再構成する第二次世界大戦下の暮らし」、『ゲルマニスティネンの会関東支部冬期研究会(招待講演)、2014年12月20日、早稲田大学国際会議場(東京都、新宿区)

MATSUMOTO, Masumi, "Images of Muslims in North China and Inner Mongolia on the Kahoku-kotsu Photo Collection" International Forum: Hui-Muslims during 1920s and 1940s: Focusing on Oral History、2014年12月19日、早稲田大学国際会議場(東京都新宿区)

加納実紀代、「『原子力の平和利用』と近代家族の成立」、『シンポジウム「原発とジェンダーの現代史」(招待講演)、ジェンダー史学会第11回年次大会、2014年12月14日、横浜国立大学(神奈川県、横浜市)

平塚博子、「冷戦初期アメリカにおけるメディアとジェンダー表象 『ライフ』誌が描いた女性たち」、『ジェンダー史学会第11回年次大会、2014年12月14日、横浜国立大学(神奈川県、横浜市)

杉村使乃、「イギリスに見る雑誌が作る第二次世界大戦下の女性像」、『ジェンダー史学

会第 11 回年次大会、2014 年 12 月 14 日、
横浜国立大学（神奈川県、横浜市）

MATUMOTO, Masumi、"Is It Possible
to Hear the Voices of Ainu Women?" THIRD
AINU-SÁMI SEMINAR: Struggles for
Decolonization & Indigenous Peoples:
Addressing, and Comparing, the Sámi and
the Ainu, 2014 年 10 月 17 日、Northern
Institute For Environmental And Minority
Law, Arctic Centre, Lapland University
(Rovaniemi, Finland)

平塚博子、「ポストブラックナショナリズム
のアミ・バラカの作品とアクティビズム」、
日本英語文化学会第 17 回全国大会、2014
年 9 月 12 日、日本大学生産工学部津田沼キ
ャンパス（千葉県、習志野市）

MATSUMOTO, Masumi、"Zhangjiakou
on the Kahoku-kotsu Photo Collection",
International Seminar on Global Design of
Mongolian Network and "Asia "The
Faculty of International Communication,
2014 年 12 月 11 日、愛知大学（愛知県、名
古屋市）

MATSUMOTO, Masumi、"The New
Returnees: the Changing Dynamics of Hui
Society in China". Session 2: Multi-layered
Connections: China and the Islamic World,
International Conference on Modern China
in Global Contexts: 1600-Present"（招待講
演）2014 年 8 月 11 日、Academica Sinica
（台湾、台北）

MATUMOTO, Masumi、"An Overview on
Christian-Muslim Relations in China"
Conference Paper of East Asia Division of
Christian-Muslim Relationship 1900, 2014
年 7 月 8 日、(Melbourne, Australia)

MATSUMOTO, Masumi、"Why was
Persian Learning Excluded?
--Secularization and Modernization of
Islam in China--" Panel 164, the Annual
Conference of the Association for Asian
Studies, 2013 年 3 月 22 日、Manchester
Grand Hyatt (San Diego, CA, US)

加納実紀代、「当事者性と一代主義」、日本
女性学会大会（招待講演）2012 年 6 月 1 日
~2012 年 6 月 1 日、大正大学（東京都、豊
島区）

加納実紀代、「エンパワメントとジェンダ
ー史の関係性」、ジェンダー史学会（招待講
演）2012 年 5 月 12 日~2012 年 05 月 12 日、
岩手大学（岩手県、盛岡市）

〔 図 書 〕(計 9 件)

池川玲子、講談社、『ヌードと愛国』、2014、
276

池川玲子共著、鈴木則子編、思文閣、『歴
史における周縁と共生 女性・穢れ・衛生』
（『青鞥』への道 保持白雨と南湖院）
2014、361(331-357)

加納実紀代 共著、岩波書店、『何を恐れ

る フェミニズムを生きた女たち』、2014、
204 (99-112)

加納実紀代 共著、岩波書店、『岩波ブッ
クレット 3.11 を心に刻んで 2015』、2015、
120(82-83)

平塚博子 共著、論創社、『Terminal
Beginning アメリカの物語と言葉の力』、
2014、324(149-171)

松本ますみ編、創土社、『中国・朝鮮族と
回族の過去と現在 民族としてのアイデ
ンティティの形成をめぐる』、2014、270

加納実紀代、インパクト出版会、『ヒロシ
マとフクシマのあいだ ジェンダーの視点
から』、2013、228

平塚博子 共著 サウンディングズ英語
英米文学会編、金星堂、『アメリカン・ロマ
ンスの系譜形成 ホーソンからオジック
まで』、2012、151(89-160)

松本ますみ（研究協力者）編、明石書店、
『中国ムスリムを知るための 60 章』、2012、
369

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

杉村 使乃 (SUGIMURA, Shino)

敬和学園大学・人文学部・准教授

研究者番号： 2 0 3 2 9 3 3 7

(2) 研究分担者

桑原 ヒサ子 (KUWAHARA, Hisako)

敬和学園大学・人文学部・教授

研究者番号： 7 0 2 3 4 6 3 0

(3) 連携研究者

神田より子 (KANDA, Yoriko)

敬和学園大学・人文学部・教授

研究者番号： 4 0 2 4 7 4 2 4

松本 ますみ (MATSUMOTO, Masumi)

室蘭工業大学・工学研究科・教授

研究者番号： 3 0 3 0 8 5 6 4

平塚博子 (HIRATSUKA, Hiroko)

日本大学・生産工学部・助教

研究者番号： 8 0 4 0 7 3 7 9

(4) 研究協力者

加納 実紀代 (KANO, Mikiyo)

敬和学園大学・人文学部・元特任教授

松崎 洋子 (MATSUZAKI, Yoko)

敬和学園大学・人文学部・名誉教授

池川 玲子 (IKEGAWA, Reiko)

大阪経済法科大学・アジア太平洋研究セン
ター・研究員